大山守と宇遅能和紀郎子

黒沢幸三

一

「応神記」には大山守命と宇遅能和紀郎子が皇位を争う物語がある。ここではその物語がすでに「帝紀」・「旧辞」の段階にはできていたことの論証から始めよう。『万葉集』巻九挽歌の箇所に、

宇治若郎子の宮所の歌一首

妹らがり今木の嶺に茂り立つ嬬松の木は古人見けむ（一七九五番）

とある。これは『人麿歌集』の歌で、これによると人麿はある時宇治を訪れた（又は通り過ぎた）ことがあったと推定される。ところが人麿には

柿本朝臣人麿、近江国より上り来る時、宇治河の辺に至りて作る歌一首

もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行く方知らずも

（二六四番）

の有名な歌がある。「孝昭記」によると人麿はワニ氏一族であり、また宇遅能和紀郎子はワニ氏系の伝説的皇子である。すると『人麿歌集』の歌はすべて人麿の作とはかぎらないが、一七九五番の歌は人麿のものとみうる公算が強い。[1] おそらく人麿は「近江国より上り来る時」より以前に宇治を訪ずれ、その際よんだのが「妹らがり……」の歌であったとみられる。その頃宇治には和紀郎子の宮処と称する地があった。一方『山城風土記逸文』によると、

宇治と謂ふは、軽島の豊明の宮に御宇しめしし天皇のみ子、宇治若郎子、桐原の日桁の宮を造りて、宮室と為したまひき云々。

とある。人麿の活躍したのは記紀の成立以前であり、また『山城風土記逸文』も記紀にない所伝を載せている。つまり宇治にはかなり古くから独自の和紀郎子伝承が存在していた。それが「旧辞」にとり入れられ、ふくらんで文学的な歌物語ともなり、他方では在地に根をおろして人麿の歌を生み、また『風土記』の伝承ともなったと

思われる。

契沖の『万葉代匠記』は一七九五番の歌について、応神天皇が大和の軽島の豊明宮にいたことや、今木が南大和の地名として知られていることなどから、「宇治」を大和の宇智に結びつけようとしている。この見解には和紀郎子の父が応神であるという強い前提があった。しかしその前提は既説のように疑わしい。[3] するとこの歌はすでに荒廃していたであろう宇治の宮処を目のあたり見てよんだものとしてよいであろう。ところが後述のごとくワニ氏は宇治に一拠点を持っていた。人麿の懐旧の念にはひとしお深いものがあったに相違ない。さらにまた後年、宇治川のほとりで詠嘆したのもその心のどこかには、かつての繁栄に対する現在の宇治の衰亡という思いがあったかもしれぬ。この人麿の二首はわれわれをはるか古代の宇治へ導くよすがとなろう。これから考察する和紀郎子の物語とはこの宇治の繁栄を基盤として作り出された歌物語である。宇治の繁栄とは前稿でも多少触れてきたように、[3] 古代の交通路と深い関係にある。古代の宇治は畿内の交通上の要地で、敦賀・琵琶湖方面からのルート、難波や大和からの水陸の路線がここに集中していた。また古墳と式内社の存在はこの地の古さを証明している（以上『宇治市史』第一巻）。そしてこの要衝の地を掌握していたのがワニ氏で、和紀郎子がワニ氏系の皇子とされているのも納得の行くことである。

二

「応神記」には天皇が大山守命・大雀命・和紀郎子に対し、

大山守命は山海の政を為よ。大雀命は食国の政を執りて白し賜へ。宇遅能和紀郎子は天津日継を知らしめせ。

とのり給う話がある。ところが「神代記」にも天照大神・月読命・建速須佐之男命の三貴子に分治を命じた段があることはよく知られている。この両者の前後関係を検討して岡田精司氏は、「応神記」の話の素材が「旧辞」の中に古くから存在していたことを指摘している。[4] たしかに「神代記」の記事に基づいて「応神記」が作製されたとは思えぬから、岡田氏の見解は正しい。するとこの話を伏線としてこれにつながっている和紀郎子物語も「旧辞」にあったと見うるだろう。その表章の一つは「其弟皇子」、「彼廂此廂」という珍しい表記からも説明できる。天皇の男子を意味するミコについては『古事記』は「王子」、「王」、「御子」と書くのが一般である。ところが和紀郎子に関して一箇所だけ、「其弟皇子」と表記されているのは注目される。これは前稿で取扱った「矢河枝比売命」と同じく不用意に「旧辞」の表記が持越されたと見うる。[5]「彼廂此廂」についてはのちに取上げてみよう。以上、宇治には記紀とは別個に古くから和紀郎子伝承が色濃くあったこと、和紀郎子物語の用字から、この物語が「旧辞」として早く成立していたことが推定されるのであ

る。

すると和紀郎子はワニ氏のヤカハエヒメの長子である。大山守と和紀郎子が皇位を争う物語もワニ氏の伝承である公算は強いと云えよう。着実にワニ氏の研究を推進した岸俊男氏はこの物語をワニ氏の伝承とは見做していないが、[16] 特に以下述べる諸点は注意されよう。まずワニ氏の日子国夫玖・建振熊両伝承はともに皇位継承をめぐる水上の合戦で、その舞台は山城から近江にかけてであった。ところが本物語も同じく皇位をめぐる水上の争いで、その舞台も山城から近江へ行く道の分岐点である。本物語とさきの両伝承との関係はかなり密接していると云えよう。それをさらに突込んで考察してみたい。

「崇神紀」の日子国夫玖伝承によると、

乃ち甲を脱きて逃ぐ。得免るまじきことを知りて、叩頭みて曰はく、「我君」といふ。故、時人、其の甲を脱きし処を号けて、伽和羅と曰ふ。

とあるが、この伽和羅は現綴喜郡田辺町河原付近である。ところが和紀郎子の物語においても大山守が水中で没する箇所にカワラの地名伝承がある。しかもそれが同じく「甲」に因んで説かれているところに問題がある。この二つの物語の伝承者は同一系統の者とみられよう。また「崇神記」によると「其廂の人、先づ忌矢弾つべし」とあり、

一方「応神記」には「彼廂此廂、一時に興りて」とある。この「廂」は『古事記』にはこの二箇所にしかない字であるが、小島憲之氏は「古事記における口語的表現を思わせる」と云って注意している。[17] 日子国夫玖伝承と和紀郎子物語とは同じ伝承者によるほぼ同時期の制作と考えられよう。

つぎに「神功皇后紀」によると、忍熊王は「菟道に至りて軍」し、建振熊側も「菟道に至りて河の北に屯む」とあるように宇治川をはさんで対陣し、最後には「田上過ぎて菟道に捕へつ」の歌謡がある。建振熊伝承の中心舞台が宇治であることは以上のとおりで、しかも記紀ともに追われて、水没する者の心を吐露した歌を含んでいることと、追いつめられた大山守が水中で歌をよむこととは類似している。また記紀によると忍熊王・香坂王はうけひ狩にいで立ち、香坂王は怒れる大猪にくい殺されるが、同じく和紀郎子の物語にも、「茲の山に忿怒れる大猪有りと伝に聞けり。吾其の猪を取らむと欲ふ。」とある。建振熊伝承と和紀郎子物語は二重写しのように重なっている。和紀郎子物語をワニ氏の伝承とみてまず間違いあるまい。そしてこの物語も他のワニ氏の伝承と同じく「旧辞」の段階にて制作されたと推定されるのである。

二

大山守と宇遅能和紀郎子

和紀郎子の物語は船上で異母兄弟が争う前段と、歌を中心とした情緒的な後段とに分けて考えられる。全般のストーリーを順次紹介しよう。

応神天皇の亡きあと、大雀命は天皇の示した盟約どおり皇位を弟の和紀郎子に譲った。しかるに兄の大山守はなお自分が皇位につこうと思い、その弟の皇子を殺そうとして兵を集めた。そのことを聞き知った大雀命はことの次第を和紀郎子に告げる。これが発端で、しかもこれは前の三皇子分掌の話とこの物語とを結びつけている。

故、聞き驚かして、兵びとを河の辺に伏せ、亦其の山の上に絙垣を張り帷幕を立てて、詐りて舎人を王に為て、露はに呉床に坐せ、百官恭敬ひ往き来する状、既に王子の坐す所の如くして、更に其の兄王の河を渡らむ時の為に船檝を具へ餝り、佐那葛の根を舂き、其の汁の滑を取りて、其の船の中の簀椅に塗りて、蹈みて仆るべく設けて、其の王子は、布の衣褌を服して、既に賤しき人の形に為りて、檝を執りて船に立ちたまひき。

この「山の上」とは宇治山で、「河」とは宇治川である。しかも話の中心は渡河にあるが、この宇治川に正式に橋がかけられたのは大化二年のことである（『宇治橋断碑銘文』）。すると大化前代においてこの川を渡るには専ら船に頼ったことになる。この物語は渡船に重きを置いて解釈すべきものであろう。引用文においても船中のことが詳しく叙述されている。「船檝」や「船の中の簀椅（簀の子）」がこまかにとりあげられ、主人公も「賤しき人の形に為りて、檝を執りて船に立ちたまひき。」とある。この物語の伝承者が船や河川に精通していることは見逃せない。

私は和紀郎子とは宇治に拠点を持っていたワニ氏が語り伝えた伝説的皇子であると思う。それはワニ氏の娘が生んだ日継の皇子であったが、なんらかの事由で皇位につくことができなかった。それで継体天皇とハエヒメの結合に基づいて応神天皇とヤカハエヒメの物語が作製されたとき[8]、和紀郎子はその長子とされ、系譜上の位置が与えられたのであろう。この悲運の皇子を美化し理想化してできた物語が当面の「応神記」と見られる。しかもワニ氏は後に説くようにこの宇治川の渡し場を掌握していた。和紀郎子が船頭に身を窶すからくりはここにある。以下の筋の展開も宇治川との関係が物語の大事な構成要素になっている。

尾畑喜一郎氏はこの物語の「文学意識胚胎の一機縁」を宇治川の「船祭りの神事」にみようとしている[9]。本物語の制作時と思われる六世紀にそのような神事があったか否かは不明であるし、また仮にあったとしても、船祭の神事が皇位継承の争いと絡んで語られる理由は説明できないであろう。

すでにみてきたようにワニ氏の伝承には皇位継承に絡む水上での合戦が多く、しかもその水上の合戦がかなり詳しく語られている。その理由は解明されなくてはならぬだろう。従来ワニ氏の特色としては祭祀的氏族ということが強調されてきたが、[10] それよりも大事なのはワニ氏と水系の結びつきである。水系とは古代においては重要な交通路で、琵琶湖・淀川・宇治川・山城川（木津川）・佐保川などはワニ氏の管掌下にあった時期が存在したと思われる。するとワニ氏は水夫・船頭集団を大幅に組織し、これらの河川に配置していたことが想定されよう。この船頭集団は平時にあっては商取引きや運搬に従事し、一朝ことある際には忽ち水上の戦士に早変りできたのである。本物語の主人公が敵を欺いて船に乗せたり、水上で船を傾けたりするのも、実は当時のワニ氏の実態から生れているのであり、ここに和紀郎子物語の特徴は指摘されなければならぬ。つまりワニ氏は船頭集団を組織し、水上の戦いを得意としていたのである。そして「宇治の渡り」とは実はワニ氏の管掌下にあったのである。

それと並んでここに問題とすべきは、皇子ならざる者を皇子に仕立てて幕を張りめぐらしたとあること、そして本物の皇子には粗末な服を着せて船頭として登場させたことである。これらの件は古伝承というよりは多分に演劇的で、われわれは簡単なショウを見ているような立場に置かれる。この物語が劇的に構成されていることについては既に武田祐吉氏や尾畑喜一郎氏によって指摘されている。[11] この視点とワニ氏が水上の戦いを得意としたことをあわせ考えると、和紀郎子物語作製の秘密はほぼ解けるわけである。つぎへ進もう。

是に其の兄王、兵士を隠し伏せ、衣の中に鎧を服て、河の辺に到りて、船に乗らむとする時に、其の厳餝りし処を望けて、弟王其の床に坐すと以為ひ、都て機を執りて船に立ちませるを知らずて、即ち其の執機者に問ひて曰ひけらく、「茲の山に忿怒れる大猪有りと伝に聞けり。吾其の猪を取らむと欲ふ。若し其の猪を獲むや。」といひき。爾に執機者「能はじ」と答へて曰ひき。亦「何由も」と問曰へば、答へて曰ひしく、「時時往往に取らむと為れども得ざりき。是を以ちて能はじと白すなり。」といひき。河中に渡り到りし時、其の船を傾けしめて、水の中に堕し入れき。

ここでは猪をめぐる会話が一つの中心になっている。それについて『古事記伝』には「さてかく猪の事を問給へるは、此の猪を取りに来坐るさまに思はせむとてなり」と、説明しているが、それ以上に問題を深めようとはしていない。前段につづいてここでも注意されるのは演劇的性格であり、それは語をかえて云えばこの物語全体は虚構されたものなのである。例えば大山守は「其の厳餝りし処を望

け」ながら台詞を云うが、いかにも敵意に燃えて弟を見ている所作が感じられる。「吾其の猪を取らむと欲ふ」は弟の殺害を意味するが、記紀の伝承は一般にこのようなまわりくどい表現をしない。直截な叙述と簡潔な会話はむしろ記紀の特色である。猪をめぐる兄弟の会話にもまたショウ的な背景を感じる。一方、「能はじ」とかさらに「時時往往に……」という機とりの応答も巧みで要所をおさえている。その落着いた答えは、心中ではすでに大山守を沈める覚悟のできていることを示している。宣長は彼ら二人がことばを交しながらも、兄弟であることに気づかないのをいぶかしがっているが、結局は「強て疑ふべきにあらず」と云っている。

今さら説くまでもないが「応神記」は史実を伝えているのではない。和紀郎子については述べたが、大山守もその命名からもわかるように造作された人物で、この皇位争いも仕組まれた一挿話にすぎぬだろう。和紀郎子物語と日子国夫玖・武振熊両伝承との相互関係を説いてきたが、骨肉が争う本物語はさきの両伝承と同じく継体天皇の擁立という相剋を基盤に創作されているのではなかろうか。継体は淀川河畔の樟葉や木津川の近くの筒城を宮処として大和の勢力と対峙した。故にある時には水上にて皇位を狙う者同志の対決があったかもしれぬ。その上継体とて王統の血をうけついだ者である。勝利者の継体擁立の側にも悔恨に満ちた感情体験があったかもしれぬ。そのような感情体験が情緒綿綿たるこの歌物語を結実させたとみてよいのではなかろうか。それはいずれにせよ、本物語の虚構性は後段の歌二首において頂点に達しているのである。

三

爾に乃ち浮かび出でて、水の随に流れ下りき。即ち流れて歌曰ひけらく、

ちはやぶる　宇治の渡りに
棹取りに　速けむ人し　我が仲間に来む

とうたひき。是に河の辺に伏せ隠せし兵びと彼廂此廂、一時共に興りて、矢刺して流しき。故、訶和羅の前に到りて沈み入りき。故、鉤を以ちて其の沈みし処を探れば、其の衣の中の甲に繋かりて、訶和羅と鳴りき。故、其地を号けて訶和羅前と謂ふ。

歌の解釈から始めよう。「ちはやぶる」は威力のはげしい意で、多くは「神」の枕詞であるが、ここでは「宇治」をウチ（霊威）の意にとって同義的枕詞として使用している。[13]「宇治の渡り」とは宇治の渡し場のことで、ここが古道の結節点で、しかも急流であったことは有名である。サヲトリニ（佐袁斗理韻）は相磯貞三氏（『記紀歌謡全注解』）が「小魚捕りに」としているがそれは無理で、諸注

のように「棹取りに」がよい。「速けむ人し」の「速け」は「全けむ」（記三一番）と同じく形容詞の未然形に推量の「む」のついたもので「船の棹を取るのに敏捷な人」の意である。モコ（毛古）は難解で契沖・宣長・守部などみな納得の行く説を出していないが、有坂秀世氏（『上代音韻考』）は『新撰字鏡』に「聟毛古」とあるのに立脚して「一緒といふ程の意かとも思ふ」としている。武田祐吉氏（『記紀歌謡集全講』）もほぼ同じ見解で「ムコは夫として迎える男子の義で、モコは、その古語と見られる。本来は仲間の義で、自分を救いに来る人の意に使用しているだろう」と説いている。「来む」は「きてくれ」の意である。すると一首全体は「この宇治の渡し場で、棹をとり船をすばやく操れる人よ、我が仲間として助けにきてくれ」で、助けを求めている歌となる。無論溺れている者が歌をよむことはできないから、これは述作者の作った物語歌で、この点にもこの物語の造作性は露出している。相磯氏はこの歌を「大雨の後等の宇遅川の漁撈の歌」としているが、漁撈と「宇治の渡り」とはそれほど必然的な結びつきはなく、またこれは独立歌謡ではない。この歌は「宇治の渡り」を掌握していた者が、その「渡り」を強調しながら物語に合わせて作った呼びかけの歌で、呼びかけの物語歌としては、ワニ氏の伝承として考察した「いざ吾君振熊が……」の歌と同じ手法のものである。

大山守と宇遅能和紀郎子

つぎは訶和羅の前をめぐる地名伝承を考察しよう。この訶和羅が現田辺町河原であること、「崇神紀」にも類似の伝承があることはすでに述べたが、この地は宇治川の下流にあるのではなく、木津川（山城川）べりの地名である。すると物語と事実との間にはかなりのずれがあることになる。物語述作者は何故こうまでして事実に合わぬ地名起源説話をこの物語に取り入れたのであろうか。訶和羅は木津川沿いにあるから木津川の戦いを中心とした日子国夫玖の物語にあってふさわしい。事実、「崇神紀」はこの地名伝承を記載している。すると『古事記』は本来日子国夫玖の箇所にあった訶和羅の伝承を取り除き、意図的に「応神記」に持ち込んだとみられよう。その意図の背景を追求してみなくてはならぬ。

まず訶和羅の位置が問題となる。前稿でとりあげた普賢寺川は筒城の宮の前を流れて木津川にそそいでいるが、[15] その河口が訶和羅である。訶和羅と筒城の宮との距離は約二キロメートルで、訶和羅はこの宮の外港的位置にある。しかも前稿では普賢寺川上流の朱智神社の祭神が『古事記』の系譜や物語に出てくることを縷説した。同じく訶和羅が当面の物語にとりあげられたのはひとえに筒城の宮が関係していると云えよう。今まで触れてきたこの物語の虚構性や劇的性格も筒城の宮におけるハエヒメの後宮を考慮に入れるとうまく説明できるのではなかろうか。ハエヒメからヒントを得て創作され

たヤカハエヒメの物語はハエヒメの後宮にて公表されたであろう。それに続く和紀郎子物語の公表の場も、同じ所を考えるのが順当である。舞台となる宇治の渡し場もここからはさほど遠くはない。後宮に仕えていたワニ氏の語部は実は水上の戦士でもあり、手近な所に伝えられていた伝説をもとに和紀郎子の物語を構成したのであろう。

日子国夫玖・建振熊の両伝承においては口承性が一つの基調となっていた。ところがヤカハエヒメや和紀郎子の物語においては、聞き手だけでなく、物語の展開を見ている者の存在が予想される。そのような箇所はその都度指摘してきたが、それはただ物語の筋を述べ立てるという意図だけから出たものでなく、聞き手や見物者に物語を面白く、また洗練されたものとして披露しようとする意図から出ている。さらに骨肉の争いに、多少場違いの歌謡が挿入されているのも、やはり芸術的な趣向によると云えよう。後宮の場は女性が中心であるし、公表されるものはあでやかで且つ優美でなくてはならぬ。ワニ氏の伝承はこのように記紀にかなり見出されるがそれらにすべて歌が含まれているのは見逃せない特色である。それらの中にあってつぎにとりあげる「ちはや人宇治の渡りに……」の歌は、迷える心とも云うべき複雑な心理を歌い出している。このような文学的深まりも後宮という背景の中でこそ始めて醸成されたのではなかろうか。すぐれた文学とは来るべき時代の動向を先取りしている。和紀郎子の口ずさむ歌に人麿の挽歌に通じる哀音を聞くのは私だけではないであろう。

四

爾に其の骨を掛き出しし時、弟王歌曰ひたまひしく、

ちはや人　宇治の渡りに、
渡り瀬に　立てる　梓弓檀
い伐らむと　心は思へど
い取らむと　心は思へど
本辺は　君を思ひ出
末辺は　妹を思ひ出
苛なけく　そこに思ひ出
悲しけく　ここに思ひ出
い伐らずぞ来る　梓弓檀

とうたひたまひき。故、其の大山守命の骨は、那良山に葬りき。是の大山守命は土形君、幣岐君、榛原君等の祖。

まずこの歌の実体をはっきりさせたい。結句の「い伐らずぞ来る梓弓檀」とは「切らないできたその（梓弓）檀よ」の意で、これを物語と結びつけて解釈すると、大山守を攻め亡ぼしに行ったが結局は

殺さないで戻ってきたよという意味になる。するとこの歌詞は物語とは合致しない。つまりこの歌は武田祐吉氏が指摘しているように本来は「別種の物語の歌」であったとみるべきものである。[14] この歌がそのような来歴を持つとすると、当然この歌には二つの解釈がなされねばならぬ。一つには本来の物語を想定し、その物語に合わせた解釈をすること、二つにはこの物語歌を熟知していて和紀郎子物語に結びつけた述作者の心を汲んで解釈すること。この二つの解釈が綜合されると、この歌をめぐる諸問題も解決されるのである。

「ちはや人」（霊威の強い人）は宇治を「氏」と解釈して冠した枕詞、「渡り瀬に」は前の「渡りに」を繰り返した語で、歩いて渡ることのできる浅瀬をさす。ところが宇治橋の断碑に「疾きこと箭の如し」とある宇治川にそのような「渡り瀬」があったとは思えぬ。これは山路平四郎氏も述べているように「仁徳即位前紀」の「渡り手」の音訛と考えるべきであろう。[15]「で」は位置や場所を表わす語であるから「渡り手」とは渡し場で、またそこに檀の木がはえているのも納得が行く。「立てる」は「生立ある」（『古事記伝』）意で、「梓弓檀」は、上の「梓弓」は枕詞のように使われている語にすぎなく全体は檀の木のことを云っている。

「ちはや人」からここまでは第一段で、景物としての檀の木を提示している。だから檀には契沖（『厚顔抄』）の云うように伏兵の意味はない。以下の「い伐らむと……」から終りまでは第二段の陳思部で、第一段に出された主題（檀）について述べながら戸惑う心理を歌うという構造になっている。故に「い伐らむ」、「い取らむ」はもとの物語にあっては登場の敵対者、本物語においては大山守を殺害せんとする意である。「本辺は」、「末辺は」は「一方では」、「他方では」の意味で、本来「君」、「妹」が誰をさすかはさだかでないが、檀の木に寄せられた陳思はこの二行に美しく凝結している。本物語の制作者もこのやさしいことばの響きに着目して、和紀郎子の歌として採用したのであろう。

「苛なけく」はむずかしいことばであるが、「いらなし」から説明するとわかる。「いらなし」はク活用の形容詞で、「いら」は草や木の刺で、また心が痛むこと辛いことをも意味する。「なし」は甚だしいという意で、形容詞的接尾語である。この「いらなし」の未然形が「いらなけ」で、それに体言的接尾語「く」がついたのが「苛なけく」で、意味は「苦痛なこと」である。だから「苛なけくそこに思ひ出　悲しけくここに思ひ出」は、「檀の木を切ったら（相手を殺したら）、君や妹がどんなに心痛し、悲嘆にくれるかと思いおこして……」の意味である。

以上、この歌本来の姿は諸注に説かれているように木に関する歌ではなく、骨肉の争いを背景とした物語歌で、おそらくは皇位継承

の物語に因む情愛の歌とみるべきであろう。そしてそのような情愛の歌であることと、歌詞に「宇治の渡り」が含まれていることが契機になって和紀郎子の物語に結びついたものと考えられる。

一方、本文の方にも歌との関連を示す箇所がある。それは「矢刺して流しき」である。物語の筋から云えば味方の伏兵が河辺にあり、しかも「彼廂此廂、一時共に興」ったとあるから、ここで矢は放たれてもよい。それなのに弓に矢をつがえるだけで大山守を追い流したのは、制作者が歌とのかみあわせを考慮したからであろう。このこまかな操作はそのまま制作者のやさしい心情を表現している。つまりここまで説明すると大分はっきりしてきたように、大山守を水上でだまし討ちにする物語がさきにあって、それに今の長い歌が結びつき、且つその歌の影響を受けながら、大山守が溺れながら歌う歌が創作されたと推定されるのである。またそう考えることにより兄弟の争いを告げる前段と歌を中心とした情緒的な後段とのやや乖離した関係もうまく説明されるであろう。木に竹をつぐということばもあるが、前段と後段とは多少成立の時期を異にしているわけである。

さて、かくて戦いやぶれた大山守は那良山（奈良市法蓮町字境目谷）に葬られた。この那良山の墓は現在奈良市北部の住宅地の中に保存されているが、そのあたり一帯はワニ氏の陵墓圏と目されている。またその陵墓圏には次稿で触れる石之日売皇后の墓もある。大山守敗退の物語とワニ氏との関係は強い。ところが墓の記述につづいて大山守が土形君ほか二氏の始祖であることが記されている。そこで武田祐吉氏はこの点に着目して、[16]

土形君　姓氏録に見えない姓である。古事記伝に、榛原は遠江の国の地名であるから、これも同国かとしている。埴土で作った人形の類を、ハニモノ・ハニワというに準ずれば、ヒヂカタは土の人形で人形つかいの部族か。それが大山守の命の物語を人形に舞わせたのが伝えられたのかもしれない。

と説いている。「土形」という表記だけに基づいて当氏を人形つかいの部族とするのは危険であり、また大山守という伝承上の人物と土形君との間に特別の関係があったか否かもわからない。その上、大山守は勝利者でなく敗者、正でなく邪の立場におかれていることも考えねばならぬ。やはりこの物語の伝承者は和紀郎子の方の関連から考察すべきであろう。

「ちはやぶる宇治」には古来橋姫の伝承があり、それは『古今集』や『源氏物語』にもとり入れられている。あの宇治川の河畔に立つ者は古今を問わず激流の中に人の世の悲しみをみる。和紀郎子の物語も宇治とは無縁の土形君や幣岐君の間に伝えられたものではない。皇位継承戦という骨肉の争いを目のあたり見たものが、そしてあの

たぎつ流れに人生のあはれを感じとった者が創作した歌物語であろう。この物語において特筆すべきは、すでに他の物語の中にあった歌をとり出し、その歌の中に和紀郎子の心を発見したことである。あの対句的表現に富んだ歌を見つけ出し、この物語に結びつけようとした直勧の力こそ注目されなければならぬ。別個の物語に含まれていた歌と、この物語との結合により、本物語は多少の矛盾を含みながらもすぐれた言語芸術として形象化されている。そして心理の葛藤という文学にとっての中心的課題が、美しいリズムと簡潔な描写で表現され、余韻は縹渺（ひょうびょう）としてわれわれの胸を打つ。短い物語であるがその感情の高まりにおいては軽太子と衣通王の情死物語に通ずるような奥行きがある。

歌との結びつきにより和紀郎子には悩みわずらう人間としての一性格が賦与された。記紀や「旧辞」の人間像とは、例えば建振熊のところで論じたように単純にして透明であることが多い[17]。すぐ人を殺したがる雄略天皇もこの部類に入る。ところが本物語の後半では煩悶する心が主題になっている。ここにこの物語の持つ独自性がある。後年各種の抒情詩を残した大伴家持は『万葉集』巻十七の長歌（三九六九番）に「苛なけくそこに思ひ出悲しけくここに思ひ出」の章句を踏襲している。和紀郎子の物語が抒情詩人の心をとらえた事情は明白であろう。このように本物語は『古事記』の中では新傾向を示す一節なのである。そしてそれを可能にしたのは継体朝の出現という新風潮の力であろう。

注

① 同じく『人麿歌集』には「宇治川にして作る歌二首」（一六九九・一七〇〇番）がある。これらも一七九五番と一連のものと考えてよいのではなかろうか。

② 拙稿「応神天皇と矢河枝比売」（愛知教育大学『国語国文学報』第二十八集所収）。

③ 注②に同じ。

④ 岡田精司氏「大化前代の服属儀礼と新嘗」（同氏著『古代王権の祭祀と神話』所収）。

⑤ 注②に同じ。

⑥ 岸　俊男氏「ワニ氏の基礎的考察」（同氏著『日本古代政治史研究』所収）。

⑦ 小島憲之氏「古事記の文章」（『古事記大成』言語文学篇所収）。

⑧ 注②に同じ。

⑨ 尾畑喜一郎氏「古代的思惟の一面」（同氏著『古代文学序説』所収）。

⑩ 例えば山路平四郎氏著『記紀歌謡評釈』、岸俊男氏前掲論文。

⑪ 武田祐吉氏著『記紀歌謡集全講』、同氏著『古事記説話群の研究』。尾畑喜一郎氏前掲論文。

⑫ 土橋　寛氏著『古代歌謡全注釈』古事記篇。

⑬ 注②に同じ。

⑭ 武田祐吉氏著『記紀歌謡集全講』。

⑮ 山路平四郎氏前掲書。

⑯ 武田祐吉氏著『記紀歌謡集全講』。

⑰ 拙稿「ワニ氏の祖建振熊の伝承」(『日本文学』昭和五十年八月号)。